

# 「LINE」アプリケーションのネットワークを活用し 進路情報をもれなくタイムリーに発信

## 高知中央高校（高知・私立）

一人ひとりの長所を伸ばす教育を実施している私立高知中央高校。看護学科と普通科があり、普通科にはエンターテインメントコースなどを設置。2016年度からはあきんど商人コース、フードビジネスコース、国立進学コース、人間力アップコースの4コースも新設される。

### デジタルに力を入れると同時に リアルな教育も大切に

同校で「LINE」アプリケーションの活用が始まったのは2012年。理事長の発案で、まずは各クラスに担任と生徒によるグループを作った。「最初は安全に活用できるのか不安でした」と進路企画部の福島健一先生。しかし、災害情報を共有したり授業変更や持ち物の連絡をするなど、連絡業務が急激に効率化された。「とくに『既読』機能は便利。もちろん重要な内容は返信を求めますし、直接連絡もしますが、簡単な連絡なら伝わったことがわかればよしとしています」と福島先生は言う。「LINE」への参加は強制で

はなく、クラスに一人二人、参加しない生徒がいる場合もある。その時は電話連絡が基本だ。

その後、部活動や教員間の連絡用など徐々にグループを増やしていった。また授業でも調べ学習などにスマートフォンを使う取り組みも始めた。情報リテラシーやモラルについては、NTTドコモなどの企業を招いて授業をしてもらう。さらに、校内に情報センターを設置し、情報委員の教員が各グループの一員となり「LINE」内をチェック。一方で、デジタルに偏ることのないよう体験授業などリアルなコミュニケーションの機会を充実させるといったことにも、気を配っている。

現在は、こうして築いた校内ネットワークを進路情報の発信にも使っている。「LINE」は進路情報を確実にもれなくタイムリーに生徒のもとに届けるツールとして適しているのだという。例えば、ある大学からオープンキャンパスの案内チラシが届いたら、進路企画部の担当者が該当する学年団の先生に画像付きで情報を流

し、先生は生徒に流す。生徒はそれを見て、必要ならすぐに進路室に現物をとりにいくといった方法だ。

「日常からさまざまな進路情報に触れることで、生徒の進路意識が高まっている」と言うのは進路企画部長の角田篤敏先生。こうした情報が3年生に頻繁に発信されるのを感じることで、低学年の生徒は「進路実現」に向けた全体的な流れを把握できる。気になる情報についてはクラスメートと話題にしたり、部活などの先輩に聞いたりされている。また、卒業生と在校生がつながるといふメリットも生まれ、先輩が気軽に在籍校の情報などを教えてくれるそうだ。

教員も、多くのグループに所属することで、可視化されるほかの学年や分掌の動きを把握できる。「結果的に学校全体に一体感が生まれました。今年の3年生は明らかに進路に関する動きが早まっています」と角田先生。生徒から「LINE」で進路相談を受け、その後、対面の面談につながることもあるという。

### 進路企画室から 担任への情報発信例



右から  
進路企画部 部長  
角田篤敏先生  
進路企画部  
福島健一先生

#### School Data

1963年創立／普通科・看護科(5年) 生徒数1128人(男子408人・女子720人)／進路状況(2014年度実績) 大学57人、専各68人、就職36人、その他2人

「デメリットがないとは言いません。しかし、前に進むためにはまずは取り入れないと」と福島先生。スマートフォンの授業中の扱いや使用時間など、マナーも年々向上しているそうだ。生徒の意識の変化を感じることで、先生たちも活用の意義を実感できている。